法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-13

<座談会>現代資本主義と農業問題

KAMIYAMA, Yasuo / 阿部, 亮一 / 神山, 安雄 / KASUYA, Nobuji / 増田, 壽男 / ABE, Ryoichi / KAWAKAMI, Tadao / TANAKA, Manabu / 田中, 学 / 川上, 忠雄 / MASUDA, Toshio / 粕谷, 信次 / NAGAHARA, Yutaka / 長原, 豊

(出版者 / Publisher)
法政大学経済学部学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
経済志林 / The Hosei University Economic Review
(巻 / Volume)
68
(号 / Number)
2
(開始ページ / Start Page)
23
(終了ページ / End Page)
65
(発行年 / Year)
2000-11-30
(URL)
https://doi.org/10.15002/00005181

〈討　論〉

現代資本主義と農業問題

（出　席　者）

阿部亮一
神山安雄
田中　学
川上忠雄
粕谷信次
長原　豊
増田壽男

座談会の趣旨

川上　「現代資本主義と農業問題」というテーマで座談会を行います。「経済志林」においてこの座談会をなぜ企画したかといいますと，農業と農政の研究と運動の分野で多面的な活動を展開しながら，志半ばで逝った私たちの同僚，五味健吉君の追悼記念号を出すにあたって，これまでに例のなかったことながら，本当に追悼の意を表す内容を求める声が強く起こったことから始まりました。この事実は生前の彼の人柄，存在感を端的に示すものと言えましょう。しかし，検討を進めるうちに，単に思い出話を語るようなことでは学会機関紙としての「志林」にふさわしいとは言えず，

あくまで学術的な内容のうえで彼のやり残した作業を追求することで，実質的に追悼の意を表すということに落ち着きました。

その考えからテーマも「現代資本主義と農業問題」と大きく構え，経済学部外から専門領域を同じくし，五味君と親しかった田中学教授，それに生前の五味君に教えを受けた神山安雄さん，阿部亮一さんに参加をお願いしました。そして神山さんには，特に五味君の書いた代表的な諸論文を踏まえてテーマについての基調論文を書いてもらいました。現実は大きく，激しく変化しつつあるにもかかわらず，このところ影を潜めているように思われる問題の根本的な把握を試みることに，参加の方々皆さんが挑戦していただきたいと思います。

神山さんの基調論文は皆さんすでに読んでおられますので，本日の議論はこれをベースにしたいと思います。進め方ですが，この論文の区分に沿って今日の話題は大きく三つに分けます。パート1は論文の1と2，すなわち問題の所在と方法，パート2は論文の3，すなわち1973年の世界食糧問題の顕在化から90年代初めにいたる農業問題の具体的展開，最後にパート3は論文の4，すなわち今日のWTO体制下の農業問題，食糧問題とその展望という三つに分けて，順に議論していきたいと思います。

それではまずパート1から口火を切る意味で，まず田中さんからお願いします。

資本主義にとっての農業問題とは？

田中　神山さんの「現代資本主義と農業問題」という論文を拝見しまして，適切に現在の問題を整理されていると思います。最初に，神山さんの主張にどうということではなくて，多少それに追加するような意味も含めて一つ二つ発言したいと思います。

一つは，この座談会全体のタイトルが「現代資本主義と農業問題」，現代資本主義となっていますが，私自身の感想を最初に言わせていただきま

すと，だいたいイギリスの産業革命ぐらいから近代資本主義が展開を始めたと考えますと，19 世紀，20 世紀とほぼ 2 世紀たつわけです。その 2 世紀の間に資本主義と農業という問題がどういうふうに展開してきたか。文字どおり，20 世紀の終わりを迎えて間もなく 21 世紀に入るというところで，過去 2 世紀，あるいは近代資本主義が農業問題をどこまで解決し，あるいはどこを解決しきれなかったかということがかなりはっきりしてきたのではないかと思っています。

これまで農業問題という言い方をするとき，特に資本主義と農業問題という言い方をするときには，資本主義は農業の問題をうまく処理できない。なかなか的確に処理しきれないというニュアンスが含まれていたと思います。その中身というか，コアになるものは何かというと，一つは，これは神山さんもいろいろなところで触れておられますけれど，農業というのは工場生産と違って資本なり，あるいは政府なり，政策主体が自由にコントロールしきれない。例えば需要と供給の問題にしても，生産が不足しているから，それじゃ，操業度を高めてというふうにしても，どこかに自然の制約等々があって工業的な手法となじみきれないという問題が一つあります。神山さんの結論でも，依然としてその問題は解決されていないというご指摘があります。そうすると，21 世紀に入ってわれわれは農業とどういうふうに対応していけばいいかということが，そこでの課題になってきます。農業問題の第 1 はやはりそこにあると思います。

もう一つ，神山さんは農業問題，食糧問題，環境問題と書かれています。いまぼくが言った一つの問題は環境問題にかかわるし，あるいは食糧問題でもあると思いますが，過去 2 世紀の農業問題のもう一つの大きな焦点は農民問題だったと思います。五味さんなどもよく「農業・農民問題」という書き方をされていたように，農業問題というのは裏を返してみれば農民の問題だったと思います。それをもう少し絞り込めば，農民の貧困，経済的な貧しさと，それと対になっている辛苦労働というか，非常に過酷な労働と低い経済性が絡み合っていたと思います。それがもう一つあったと思

います。

これについて日本でも，農業問題というときにこれまでずっと農業経済学者が議論してきたことは，農村，あるいは農村住民の貧困問題と，それと対応して辛苦レーバーというか，これをどう解消するかということでした。これは目標としてはわりにはっきりしていて，辛苦労働に関しては例えば機械化とか，堆肥のかわりに化学肥料を使うとか，一種の工業的な生産性，上昇の手法を農業にも応用していくことが一つの方向でした。それから貧困の問題についていうと，日本の場合，貧困から解消されたと言うべきかどうかということがありますが，この二つがあると思います。つまり，農業を通じて所得を高めていくという方向と，それにはあまりこだわらない，ともあれ農村で暮らしている人間が都市の労働者なり，あるいは都市住民並みに豊かになればいいという考え方です。結論からすると中途半端だけど，日本とかECを見るとかなり兼業化が起きています。いまの日本でもだいたい農民の所得の3分の2，7割ぐらいは兼業収入ですから，そういう意味でいえば変則的かもしれないんだけど，カッコ付きである程度解消されたと思います。

ただ，そういう問題はなくなったのかということになりますと，神山さんが指摘されているように，結果的にかつてあったような国民経済という枠の中では，ある程度農村住民の所得が上がった国もあるけれども，全世界的に見れば依然として圧倒的多数の農民が貧困であり，貧困であるから安い労働で，しかも辛苦的な労働をやっているという問題があります。国境の枠は少し変わったけれども，神山さんは南北問題と書かれていまして，そういうふうに言ってもいいのかなという気もしますが，世界的に見れば，その問題は依然として解決されていないというか，むしろますます解決困難になりつつあるのではないか。だから，近代の資本主義が挑戦してきた農業問題は，生産力の面でも一つ転換しなければいけないというような意味で限界を露呈したし，それから農民問題というか，貧困問題としても南北問題という形で，従来のやり方ではそれが解決しないという問題性をむ

しろますます明確にしてきた。これが現状ではないかと思います。

この間，世界的にも国民経済的にも農業問題の解決の一つとして，農業の生産力を高めるというのが基本的な方向性として据えられていたと思います。それがどうか，どういう形で生産力を高めていくかというと，基本的には近代思想というのは工業的な手法だったと思います。これがはっきり出たのが，神山さんが書かれているように1970年代以降です。70年代初め，73年の世界的な不作と穀物価格の騰貴があって，それ以降，特に先進国，EC，日本，アメリカというところでも，特にECと日本はそれまでの輸入依存という考え方からある程度自給する，国内での生産力を高めるということをやったわけです。アメリカでも穀物価格が上がったということで農業生産にアクセルがかかったわけですが，その方向は典型的な機械化と化学化でした。

それで少なくとも食糧の自給というか，ある程度の生産力を達成したけれども，そういう方向でずっと行けるかということで，まさに神山さんが書かれているように，ここへ来て問題になっているのが地球的な規模での環境問題です。つまり，そういう方向の延長線上で特に農業生産の増大を考えていくこと自体が非常に難しいということが一つ出てきました。では，それを回避しながらどうやっていくか。途上国の食糧問題を解決し，途上国の農村民の生活水準をどう引き上げていくかというのが，いまぶつかっている現代資本主義の農業問題だと思います。

増田　田中学さんの問題があまりに大きかったんですが，農業問題論ということを普通考えたときにマルクスなどが一番問題にしたのは，土地所有が一種のネックになっているので，この土地所有をどう解決するかということによって農業問題はかなり解決するのではないか。そういう明るい展望というか，特に地代論などはそういう形で書かれています。そういう形の農業問題の解決という方向が，特に90年代に入っての社会主義の崩壊との関連もあって，果たして社会主義において農業問題が解決するのかという疑問が，最近いろいろな形で出てきているだろうと思います。

それは何かというと，やはりどう考えても工業生産と農業生産は，生産力においても，その他の労働力においてもかなり違うのではないか。それを一義的に，どっちかというとマルクスなども工業生産に近い形で問題を解決できるような一面を持っていると思うけれど，どうもそうではないのではないかというようなことがだんだん出てきている。でも，工業生産のほうが極端に環境問題につながっていくということもあって，じゃ，元の有機農業に戻すかというと，これではとうてい世界の食糧生産を賄えないというふうな形でデッドロックになっているような問題があります。

そうすると，農業の生産力の発展がどういう形でもなかなか工業の生産力の発展みたいなわけにいかないということも含めて，土地所有と関係する部分と，そうではなくて，神山さんが書いているように，本来持っている農業の生物学的な側面とか，自然条件その他によって制約される条件といった問題がかなり大きい側面を持っているということになりますと，社会システムと農業問題の比重がどの程度なのかということもかなり大きく問題になると思います。

資本主義では解決できないだけではなくて，農業問題の本来的な解決というのはどういう形になるんだろうかと考えますと，テンポがゆっくりな，言ってみれば自給生産体制みたいなものが社会的に保障されていれば，農業問題はそんなに問題として大きくなってこないけれど，片方で急発展するような工業が存在するかぎりにおいて，農工間格差という形で必ず問題が出てきてしまいます。そこらへんをどうするかと考えたときに，現代において農業問題を議論する場合，尺度が昔ほど単純に考えられなくなってきているようなところがいっぱいありますから，問題自体がなかなかとらえにくくなってきているのではないかという感じがします。

粕谷　農業問題とは何か。宇野さんも資本主義は農業が苦手だと言っていましたが，神山さんも五味さんの通信教育のテキストの「農業論」を参照しながら，とくに使用価値的な側面を強調されています。いまの田中さんの話でも，工業的に解決して生産力を上げていくということが，自然の

制約だとか，生物の生命過程を経なければならないということで農業というのはそういう具合にいかないというところが強調されています。しかし，苦手だといったとき，いま言われたことを前提にして，もう一つそれに加えて強調しなければいけないのは生産関係的側面です。資本主義以前の前近代は農業社会です。そのコミュニティーでは大多数が農民として生きてきたけれど，それを資本主義的にどう処理できるか。ところが潜在的過剰人口の問題がある。資本主義がこの過剰人口の問題を解決できるならば，かなりのところは解決されてくるのではないかと思います。

ところが例の農業恐慌論で，特に大内力先生などが強調したのは，使用価値的側面でなく，極めて生産関係論的な側面，すなわちいまはそれが正しいかどうかは別にして資本主義が帝国主義段階になると恐慌の形態が変化し，慢性不況的になってくる。その反映として，農業恐慌や，先進国の農業保護主義が現れ，途上国の農業発展も難しくなり農業恐慌も世界化するという論理ですね。両方とも必要で，片方だけを強調してはだめだと思います。

現代においてそういう観点から見ると，神山さんが強調されてきた南北問題について，途上国で工業がうまく展開していけばいいんだけど，だいたいその工業がうまく展開できなくなってしまう。おまけに農業は苦手だと言っていたんだけど，アメリカは補助金を付けているのが問題なのだけど，限定的な意味でいえば生産性が高くなってしまった。高くなってしまって途上国の農業が壊れてしまう。日本みたいに工業を発展させれば，輸入できるからいいじゃないかということなのだけど，途上国はそれもできない。そこで，田中さんが言われた貧困の問題というのが世界的規模で非常に深刻になってくる。

それは資本主義が過剰人口，あるいは潜在過剰人口を処理できなくて，それを特に南へしわ寄せをさせている事の現れです。先進国ですら過剰人口の問題を処理できないで保護政策をとっているわけです。アメリカはいろいろな形の，手を変え品を変えて保護政策をやっています。アメリカも，

農業をやめて途上国から輸入すれば，UNCTADではないけれども，援助よりも貿易だというふうになれば途上国にも展望が出てくるのですが，逆にそれを決定的に壊して先進国が農業の輸出国になってしまった。途上国としてはこれはもうどうにもならない。前近代から資本主義的にうまく行けないし，社会主義でも駄目。そこが最大の問題だと思います。

田中　最初に増田さんが言われた土地所有の制約という問題はやはりあると思います。少なくとも帝国主義段階に入った時期もそうかもしれません。日本で言えば，かつての農民問題はある意味で土地所有の不平等でした。これは一義的には，世界的にもいろいろな農地改革がありましたが，農地改革によって分配の不平等をある程度改善することということはこれまでもやってきました。まだいまでも残っているところはありますが，それはそういう形でやってきたわけです。

そこでの一つの問題は，先ほどの話では触れなかったんですけれど，例えば中国では合作社から人民公社へ進んでいます。かつてのソ連もそうですけれど，これは集団化することで土地所有の不平等問題を解決しつつ，集団化することによって農業生産力も高める。これが社会主義の農業の実験でした。これは一面では効果を上げましたが，集団農業から個別農業という方向で，まさにここに来てむしろ一斉に逆流を始めたわけです。それが何を意味しているのかというのが一つあると思います。この間の，特にソ連，東欧，中国を中心にした社会主義農業の成果と，それがなぜうまく展開しきれなかったかという点の総括がもう一つ必要だというのはそのとおりだと思います。

神山　「現代資本主義と農業問題」と大上段にかまえて考える中で，五味さんの方法論は何だったのかなということを考えさせていただきました。五味さんが一番初めに書いている助手論文「アメリカ金融資本形成過程における鉄道業と農業の連関について」は，特に金融資本の形成過程から始まっていますが，資本蓄積過程と農業との連関をどう考えていくのか。そこに農業問題があるのではないか。これがどうも五味さんの方法論だった

のではないかという感じがしています。

そういうふうに考えてくると，現代資本主義とは何なのか。その下で農業問題が解決されずに存在していく。農業問題の展開の中でむしろ食糧問題とか，農業の生産力の発展との関係で環境問題も出てくる。いま経済学の最終目的が現状分析であるんだったら，そこを明らかにしないといけないのではないかと私は考えていますが，この短い論文で十分かと言われれば不十分だと言わざるをえません。

あと一つの問題は，現代資本主義とは何かということになるだろうと思います。時間的な制約とか，私の問題の立て方とか，“現在”をどうつかまえようかを考えてしまったものですから，現代資本主義とは何かとなってくると，大戦間期，特に大恐慌以降の世界経済，アメリカが大工業国であり大農業国であることによって世界経済の基軸になっていると思いますが，そのアメリカ一国の経済状態だとか経済力だとかが絶えず世界経済の動揺といったところにつながってきた。そこをもう一つ深く考察していかないと世界農業問題は明らかになっていかないだろうと思います。

ただ，私の問題は，それを頭に置きながら同時に70年代以降，アメリカドルが金兌換を停止して，金の裏打ちがないドル本位制というふうなものになってきたところの，むしろ食糧問題なり，農業問題なりという形で表れてきた問題，その一端をいささかでも明らかにできたらなという考え方をしたんです。それが当たっているのかどうか，むしろご指摘をいただきたいと思っています。

長原　農業問題から離れて久しく，いま何が議論されているのかほとんど知りません。というわけでいい加減な疑問しか持てないんです。とはいっても，神山さんのペイパーを読ませていただいて感じたことは，いわゆる「現代」をいつから議論し始めるのかという問題です。宇野弘蔵が言うように，現状分析の対象が第一次大戦以降ということで，それに忠実に従ってきた人びとは，それ以降の時代をいわゆる国独資論などによって議論したり，いろいろ考えてきたんだけれども，結局みんなうまく説明できなく

なって，ついにはいわゆる“現代”と言ってしまったということがあるだろうと思います。じゃ，現代はいつなんだとなって，もう何も言いたくないと言うんで，文字どおり現代資本主義というある意味で理論的規定抜きのニュートラルなネイミングになってしまっている。問題は，現代資本主義と言ったとき，どのように時期区分するのか，といったオーソドックスなことをもう一度しっかりとやらなければいけないんじゃないか，という問題意識ぐらいは継続的にもっています。

そこから粕谷さんがおっしゃった議論のほうへ向かうと，恐慌の形態変化という議論がその背後に存在していて，僕としてはそもそも大内力さんのような理解でよかったのかという問題意識をもっています。宇野の恐慌論の中ではいつも捨象されているんだけれども，純化がきれいにいくためには，その〈外部〉に雇用されていない人間が必ずそしていつも存在していなければならない。宇野は梅本克己との対談で，産業予備軍を相対的過剰人口として純化したんだと言っていますが，その意味では宇野の恐慌論それ自体は，いわゆる形態の「歴史」的変化を云々する以前に，固有な意味での〈外部〉を常にもっていなければ成立しないということを，きちっと言っておかなければならないだろうと思います。そうした議論がなされていないと，いわゆる資本主義にとっての農業問題を「理論」的に把握できない。宇野経済学と称される人びとがあるモデルのなかでさかんに農業問題を「つくり」あげるんだけど，具体的に粕谷さんが言われた南北問題も含めて，また世界的に存在する貧困の問題も含めて，資本主義はつねに〈外部〉を必要としているし，またそうした〈外部〉を併呑するという歴史的運動を進めながらも，しかしこの〈外部〉が存在しなくなれば停止してしまうといった，みずからの完成のためには必ず〈外部〉を必要としながら，そうした〈外部〉が自己にとってつねにきわめて厄介な存在としてもあるという，つねに二者である他ない一者へ向けた歴史的運動なんだという視点を，農業問題を考えるときも，つねに経済学者はもっていなければならないと思います。

そうした問題をさらに戻って増田さんの視点から言うと，増田さんは土地問題だと言われたわけですが，現代資本主義という以前に，理論的にも，これは大内さんや日高さんみたいに，差額地代から絶対地代を説くんだというところまで「転倒」させて，それでもって飽くまで理論的に美しくありたいというのなら別なんですが，問題は絶対地代というものがうまく説けないということにあります。五味さんが信用問題へ興味を示されたということに引っかけて言えば，土地所有を擬制資本として流通させる，流動させるということを土地問題と現在のグローバリゼーションとの問題として，資本による土地所有問題の新たなる「解決」方法というような議論もできる可能性があるわけですが，しかし問題はそうした議論を展開するにあたっても，以前のようなマルクス経済学の農本主義的な適用と言ったようなやり方ではなく，現状の資本主義の運動との関連から見た土地問題の解決がまったくできていないという点が僕にはもっと重要です。ここには，美しいモデルのなかで，例えば恐慌論にも表れているんだけど，〈外部〉といったものをいつも排除して，それでもって農業問題とは何か，といったふうに処理してきたという問題がふたたび表れていると思います。

そうすると，田中さんがおっしゃった，またずいぶん前に工藤さんの議論にもあるわけですが，資本主義が「処理」する農業問題とは何か，とは資本主義から見たものだろうと思います。資本がさっき言った意味で厄介なものをどのように処理するかという，処理の具体的な方法について議論していることが農業問題だというふうに僕らははっきりと議論を限定すべきだと思います。つまり，農業問題というのは資本主義にとっての農業問題だったわけです。だから，その処理の仕方について，宇野さんは不得意だとか苦手だとか言っているんだけど，そもそも苦手だって不得意だって，資本は本気で農業問題を解決しようと思ったことは一度もないと思うんです。そのつど具体的にどう処理するかということだけが問題だったんです。そうすると農業問題は工藤さん風にいうと，処理「機構」すなわち「支配」の問題なんだけど，それはいずれにせよ資本にとっては「具体」的に「処

理」されるに過ぎない問題であって，最終的に「処理」され，その意味で〈外部〉の一つが消滅することをを願ったわけではないだろうと思います。「処理」しきれないのはわかっているわけですから。

現代資本主義の農業問題と言ったとき，「現代」とは何かも含めて，そもそも現代資本主義と農業問題というのはいつまでたっても資本にとっての農業問題であって，資本はそれを解けないということをあらかじめ前提にしておかないと，具体的に解決されたなんてことは一度もないということをきちっと言っておかないと，いけないだろう。

そうした視点からいうと，田中さんの議論では農業問題は同時に農民問題でもあったということになるわけですが，それはある意味で非常に危険な言い方なんです。農業問題というのは資本にとっての農業問題であって，「処理」「支配」の問題でもあるという意味では，農民問題と背中合わせではあるんだけれども，しかし農民問題というのは根底的にまったく視点が違うものだというふうに僕らは言っておいたほうがいいだろうと思います。最も重要なことは，誰が農民かを決定してきたのは農業政策だった，という点です。いわゆる資本にとっての農業問題では「農民」は政策によってあらかじめ与えられているのです。資本にとっての農業問題では，政策対象が政策主体によってあらかじめ与えられたうえで，「処理」され，それ以外の，すなわち政策主体が「農民」という資格を与えた人びと以外は，「処理」どころか排除される対象なのです。そうしたことは農業統計における「農民」の定義一つとっても一目瞭然です。例えば，マルクス経済学が依拠するマルクス『資本論』は資本の運動について理論的な説明を与えており，賃労働論ではない，という議論も，農業問題における特に宇野派的な「処理」と同様の陥穽に陥っています。労働問題はともあれ，だから農業問題は農民問題でもある，と簡単に言うわけにはいかない。農民問題といったとき，これは栗原百寿もそう言ってきたし，五味さんにもある種残っている視点ですが，オルタナティブとしてどのような「解決」を出せるかという形で農民問題を考える視点であって，そのことを経済学が「科

学」的に叙述するということにずっと囚われてきたことを考えるとき，農民問題と農業問題が簡単にオーバーラップされてしまうと，これはちょっと一言言いたくなる。農業経済学者は，いま！，いったい何をやっているのか，といった存在意義を問われるようなことになる。この間，環境問題だとか「開発」問題だとかいった論点へ逃げ込んで，現代資本主義における文字どおりの農業・農民問題を見えなくしてしまっている，という問題は非常に危機的ですらあると思います。

川上　なるほど。

粕谷　資本主義というのは外部がなければ成立しない。だから，基本的に資本主義にとっての問題である。農民問題は次元が違う。真に対応すべきは農民問題なんだと言われる長原さんと私も基本的に同じような方向というか，スタンスは持っていますが，その先が問題になってくると思います。初めに農業問題は資本主義の問題だと長原さんが言われたようにそれを確認したとしましょう。確認して，その次はどういうステップを踏むのか。

資本主義というのは歴史的に展開してきましたよね。そのときにそれぞれどう処理してきたのか。処理にしかすぎないけれど，どう処理してきたのかということを押さえたうえで実践の局面とか，あるいはもう少し冷静にいえば政治経済学的分析だとか，さらにその次は実践の問題だとか，いろいろなディメンジョンがあると思います。弁護するわけではないけれども，現状分析の半分というか，資本主義がどういう形で処理してきたかというその変化は追わなければいけないのではないか。

現代というのはいつかというのはたしかにそうです。ちゃんとしなければいけない。ここでは触れませんがそれぞれみんないちおう持っているんだと思うんです。さらにそれを踏まえて現時点というのは，どういうふうに資本は動いて，どういうふうに形態を転化させていったか。そうすると，現代の農民問題への対応の陣形はどうあるべきか。あんまり対決的に構えてはいけないというのがぼくの持論なんですが，（笑）その時代，時代に

沿わないと適切な対応ができないのではないか。

増田　ただ，長原君が言うように，あんまり切らないほうがいいという面もあるというのは，処理の仕方に問題があるから農民運動が起こるという面が必ずあるわけだから，これは処理されたんだ，こっちは別だというふうにやってしまうと問題としてまったく，それこそ分析する人と農民運動をやっている人はまったく無関係というふうにそう簡単にはいかないから，そこらへんはもうちょっと連関をつけないとまずいんではないですか。

長原　ぼくが言いたかったのは，処理する機構，処理する主体が国民国家とか国民経済という形でずっとやられてきたということです。ある種の国民の領域性とか領土性の中で行われていて，例えば城内平和の中で外に出て転化するとか，時代的にさまざまなシステムに変わってきたと思うんです。現代資本主義と農業問題といったときには，国民経済という枠がなぜ維持されているのかというところまできちっと議論しなければならないところまで来ているわけです。だから，農業問題を処理する機構の主体がどこに踏ん張っているのかということがぎりぎりの問題としてあるので。

粕谷　そこが重要だと思う。

増田　それは最後の問題だ。

川上　そこは方法的に鋭い指摘ではないかと思います。

田中　長原君が言うように，方法的にいえば農業問題と農民問題は次元が違うというのはまったくそのとおりだと思います。ただ，それを前提にして現代資本主義とは何かという話が出たんだけど，現代資本主義というのはまさに資本主義一般かというと「現代の」資本主義なわけです。そうすると，例えばある時期，社会主義対資本主義というのがあって，それを市場経済と計画経済というふうにとらえられてきたけれど，いま現在の資本主義というと，WTO なんかまさしく自由競争とか自由主義を標榜していますが，裏を返してみると，そのことをガンガン言わなければならないほど，資本主義が「計画化」された側面があるわけです。

だから，相当程度，かつて社会主義が言ったようなことを資本主義がやっ

ている。農民政策なんかもそうですよね。例えば直接所得保障なんていう話が市場経済のどこを押したら出てくるんだということになると思いますが，そういうことを実際にやる資本主義になってきたわけです。だから，資本主義対社会主義があって，まったく原理の違うものが対峙していて，その一方がなくなって一方が残ったというのとはまたちょっと違うような，ある意味で社会主義的思考みたいなものが資本主義の中に一面ではかなり入ってきた。特に各国レベルで見るとそういうのが入ってきています。じゃ，それは計画的に何をするのかというとき，ここでできたメジャーみたいなものになってくると，これはもうちょっと国を超えた，カウツキーの超帝国主義みたいなものが一方では膨れあがってきているわけです。

現代資本主義をどう定義するか。あるいは原理論から段階論，現状分析について話をどうつなげてくるかと言われても，たしかに資本主義とか資本主義経済というんだけど，現代資本主義というのは昔とは相当変わっているというところをある程度確認しないといけないだろう。そういう意味でいうと，非常に政治経済的資本主義になってしまっているわけです。

阿部　長原さんの，30年前には自分も加わっていた議論の方法に，久し振りの逆カルチャーショックを受けています。その後，伊東光晴さんのケインズ経済や現代経済学に関心が移り，しかも沖縄に島流しになりまして，超現実問題について，具体的に沖縄の失業問題，卒業生たちの就職先がないのをどうするかということについて，つぶれそうな大学の中でやってきました。どんどん離れていって，久し振りにそういうきちっとした議論をしなければいけなかったんだということを思い出しています。

私は五味先生の最後の，病気になられた五味先生からの一部のゼミの代行を頼まれて，昔のことでやらなければいけないのかなと，それこそ栗原百寿でしごかれたゼミの時代を思い出していたんですが，いまの学生というのはまったく感覚が違っているんです。あれだけシビアな，議論のうるさい五味ゼミの伝統が，安全保障なんていう以前の個別の，いまや都市の食糧安全問題ですね。ですから，公害問題とか，アルバイトをしているファー

ストフード店におけるゴミ処理問題とか，ゼミ長あたりの論文がみんなそういうテーマになっていて，従来のオーソドックスなパターンの農業問題とか，南北問題としての農業問題というふうなテーマは半分以下になってしまっている。しかもデータの乏しいテーマなのに，独自の調査を加えないからマスコミ報道を追う以上の分析はできない。そして全体にゼミに集中できていない。そのあたりで私自身とも合わなくなってきたというところがあります。そのへんを五味先生はどうとらえているのか。五味先生だったらどう言うのか。最後の五味ゼミの看板をよろよろとかついでいた者としてはそんなことを考えています。

ずっと思い返してみると，30年ぐらい前の，われわれが，ゼミにもぐらせてもらって議論していたころからあった五味先生の方法論，農業に対する方法というより姿勢がわかったようでわからないまま，発言を聞けない彼方に行かれてしまったという感じがずっとしています。先ほど田中先生のお話にもありましたが，「農業・農民問題」というふうに彼は昔から言っているわけです。そこでは主体としての，農業の担い手としての人間集団としての農民がいて，一方の農業というのが産業分野としての資本主義に編入されている状態であれば，資本主義の産業の一問題としての農業問題がある。彼は一貫してこれを切り離せなかったんだと思っています。

彼はゼミでわれわれに何を言うかというと，いきなり「君らは米俵を持てるか」という話から入るわけです。いい加減な，いまの学生たちが言うような食糧安全問題，農薬多肥の問題について，新聞等で30年ぐらい前からすでにいくつか問題になっていることをちょっと取り出すと，そのとらえ方は甘っちょろいという形ではねつけられるんです。

最近の学生もそうであったというんです。有機農業をすべきではないかなどというと，都市の非農業都市住民がそういう衛生観念に基づいた観念で言って，おまえら，百姓の心がわかるのかという形で30年前も言ったし，おそらく数年前まで，亡くなる寸前まで学生にはおしゃっていたようです。そこのところでは長原さんとはまったく対極にいると思うんだけど。

彼自身の出自，生まれ育ちがそうですから。百姓をしながら，学問したくてもできなくて，通信教育を受けて必死になって勉強して，論文を書きながら八ヶ岳の冷たい，やせた土地を耕さなければいけない。それを繰り返した彼自身の原存在から来てしまっているから，理論的に整理しきれないままでいったのではないか。では，農業をとことん愛しているのかというとそうでもなくて，彼の場合には家における百姓，男手のやらなければいけないことに対するある意味のすごいうらみ，つらみみたいなものがはっきりあった。その後いろいろあって，そうかといって切れるのかというと，皆さんご存じのところですけれど，農民問題にずっとコミットしてきています。そのあたりでも彼は整理したくない，しきれない，アンビバレントな心というか，愛憎相半ばする強烈な心で生き抜いたということではないか。ですから，五味さんをめぐって彼の農業論とは何だったのかということを彼の追悼文みたいなものを書きながら思い返してみると，文学的な言い方をすると彼自身の生きざま，生まれて死ぬまでの過程が出ていたのではないか。農業実践者，農民運動家，純粋な農業経済学者のいずれにも，なり切れなかったし，ならなかったのが，五味先生ではないでしょうか。

1970年代からの世界食糧問題の展開とその構造

川上　問題の所在と方法について皆さん意見がいろいろおありのようで，さまざまな指摘が飛び交いましたが，最後は五味君の生きざまに話が行きました。

そこで，いままでの方法論議を踏まえて具体的に，1973年から世界食糧問題が顕在化してきて，さらにその後どう展開したかというところへ，パート2に議論を移したいと思います。論文を書かれていますが，神山さんから口火を切ってもらえませんか。

神山　70年代初めが世界経済の転換点にあるのではないかと思えるわけです。論文でも書きましたけれど，それはパックスアメリカーナが衰退

して再編されていく過程であると思います。71年の夏，日本ではニクソンショックというふうな言い方をされましたが，アメリカドルの金兌換停止宣言があります。戦後のIMF体制はここで崩壊した。あわせて世界一次産品問題が発現してきた。これは一つは第1次石油ショックだったし，もう一つが世界食糧危機だった。その世界食糧危機の性格についてどうとらえるのか。60年代までの世界経済と70年代以降の世界経済の変容がもうひとつ論点になるのではないかという前提の上で論文をまとめたわけです。

世界食糧問題ということでいいますと，一つはアメリカとソ連という大国が70年代初めに政策的な転換をしているのではないか。60年代までの農産物の過剰というのは商品としての農産物が過剰であるということですが，ソ連“社会主義”圏が穀物の大量の恒常的な輸入国として世界穀物市場に参入し，アメリカが膨大な穀物在庫を取り崩してこれに対応することによって，70年代初めの段階で食糧として不足したという状態ができあがった。それは一時的な問題であって，その後も底流としては商品としての農産物の過剰状態は続くんだということはたしかにありますが，決定的なのはソ連を中心とした社会主義圏が穀物の輸入国として世界穀物市場に参入してきたことです。そのことによって需要が拡大する。そういう面では商品としての農産物も不足してくる，特に穀物が不足状態になってくるということだろうと思います。

この段階からむしろソ連というか，ソ連社会主義が衰退過程に入ってしまったのではないか。特に穀物の輸入原資について，一つは原油の輸出，それも西側世界に対する輸出だったわけです。あとは，金がなかなか数字がつかめないんですが，金を中心とした貴金属類もロンドン市場といったところに放出してきます。天然資源を一方で食いつぶしていくという経済政策に変わっていったわけです。それが70年代初めなのではないか。

あと一つの問題は，世界食糧問題というのが南北問題として表れてきたという点です。60年代を通じて特に旧植民地の南側の世界では食糧不足

の状態がずっと続いていたわけですが，それが穀物の国際価格が安い水準で安定している，あわせてアメリカからの食糧援助等々があるということで押し隠されていたのが，一挙に価格が暴騰することによって南北問題という形で表れてくる，顕在化したということです。その後の展開，紆余曲折はありますが，基本的には，先進国では食糧は，商品としては過剰であり，開発途上国では食糧が不足するという状態がつくり出されてきます。世界食糧問題の構図というのが南北問題，あるいは産油国と非産油国という形でいえば南々問題としてもある。五味さんが明らかにしたことですが，南北問題，南々問題が，食糧問題の構図の中にある。さらに言えば，私は専門家ではないものですからあまり踏み込みたくないんですが，国際的な資金循環との絡みで農業問題，食糧問題をとらえていく必要があるのではないかというふうに感じています。

田中　いまの神山さんの話にあったように，仮にソ連が石油と金を放出して食糧を輸入するという形になると，文字どおりネットの食糧需要がそれだけ増えるわけです。それがきっかけになって穀物価格が上がって，つまり購買力のない南の食糧不足の実態が浮かび上がったという筋書きは非常によくわかります。

南の中にも産油国とそうでない国，南々問題とおっしゃいましたが，それと，あと，70年代から現在まで，特に80年代を見ると，ヨーロッパ，日本，アメリカもそうだけど，そこでものすごく穀物の単収が上がっているわけです。これは意図的にそれらの国がやっている。逆にいうと石油資源，化学肥料とかそういうものの多投入で多収穫ということを典型的にやるわけです。その間非常にパラレルに投入と産出が増えていきます。どこまで行くかというと，だいたいここのところへ来てそれがややてっぺんに来たということと，多投入に伴ういろいろな，いわゆる環境破壊とか自然破壊という問題がパーッと出てきたわけです。その面では南々問題，南の問題を明らかにしたと同時に，北の，アメリカ，日本，ヨーロッパ中心の先進国型の農業発展の限界というか，問題点もそれを通じて，時期はちょっ

とあとになるけれども，はっきりしてきたというのがこの時期の問題だと思います。南々問題と対比させていえば北々問題というか，WTO につながるような，自由貿易とか農産物貿易の自由化という議論を主にやっているのは先進国相互の問題ですよね。

川上　ほか方も，どうぞ。

増田　神山さんによれば，アメリカの農業生産力というのは，財政支出における穀物価格支持政策によって支えられたという側面を言っていますが，60 年代ぐらいまでの，アメリカの農業生産力は過剰であったかもしれないけれども，アメリカは圧倒的に農業生産力が高いわけです。そうすると，70 年代ぐらいからかなり農業生産力がデッドロックに来ているのを例えば保護政策で維持していたのか。それともそうではなくて，まだまだ 70 年代もかなり伸びているというような状況であったのかということになると，70 年代ぐらいからそんなに農業生産力が上がらない状態になりつつあって，地肥なんかも化学肥料をいくら投入してもなかなか生産が上がらないみたいな状態になっているのを，何とか財政支出で維持するということをやっているのかなと思っていたんです。

そうすると，IMF 体制が崩壊してアメリカが財政危機に陥って穀物価格支持が非常に難しくなってきたので，その分を輸出に回せということになって，それにたまたまソ連が買うという条件があったのでというふうな話になっていますが，アメリカが穀物を輸出するという政策に基本的に転換したのは 70 年代なのか。どうも話は，そこになって急になったのではなくて，アメリカは一貫して輸出国であるというイメージが私にはありますから，ここですごく変わったようなイメージが何かあるのかなと思って，そこらへんがちょっとわかりにくいのですが。

川上　私は景気循環をやっているせいもあって，この神山さんの論文では南北問題として登場したという構図のほうは鮮明に出ているんですが，私の感じからすると，動態としてどうだったかということのほうが非常に気になります。それでいうと 73，74 年に世界食糧問題が出てきたという

のは，その原因として，一つはソ連の方の行き詰まりがはっきり言われたけれども，資本主義世界の方も異常な高度成長が行き詰まって限界に来た。その両方がたまたま符合して，ボトルネックとしてのこの73，74年の食糧不足，第1次産品不足というのが出たということではないかと思います。

そうすると，そのあとは過剰でずっと基調というふうに行くのか。それともそうではなくてもうちょっとデリケートなのか。そういうことが問題になるような気がして，そう思って統計を見てみると，95，96年にもう1回，世界食糧不足が出そうな感じになって，出たのか出ないのかというぐらいで引っ込んだというのがあるなと思っています。そうすると，あとはずっと過剰だというよりも，ダイナミックな動きをもうちょっとちゃんとつかむ必要があるように思えました。

もう一つ，いま増田さんから出た，アメリカがいつ政策的にという問題ですが，これも私がいまやっているところとの兼ね合いでいうと，80年代に入ってからアメリカというのは大きな発見をしたのではないかという気がします。自分に適した，新しいグローバルな資本蓄積の新しいシステム，方法を見つけた。実は自分は経常収支で大赤字を出しながら国境を取り払ってグローバルに資金を集め，そして自分が中心になって資金循環をやりながら自分のところの資本蓄積をやるというスタイルですね。ところが，その方法だとドル高にしてそれをやるという構造ですから，自分は知識集約型の新しいビジネスに集中し，製造業でも弱いやつはどんどん外へ出してやるというスタイルです。そのときに農業を外に出してやるというふうにやれば一貫するんですけれど，それはできない。そこの矛盾が非常に出ているのではないかという気がします。

田中　先ほど神山さんも言いましたが，70年代のところで金とドルを切り離すわけです。戦後，アメリカに金兌換を請求したのはドゴールがちょっと口にしたぐらいで，実際はなかったから実質はなかったといえばないんだけど，あそこではっきり金とドルなり，金と通貨のつながりが切れてしまいます。そのことの意味は，いま川上さんが言われたように，その後の

世界的な資金循環とか何かにどういうふうにかかわっているんでしょうか。

長原　いますごくおもしろい話になっていると思うんだけど，神山さんが言われた国際的な資金循環と世界の農業問題をつなげて考えるというのはとても大事な視点だと思います。神山さんが言われた，80年代におけるアメリカのある種の発見みたいなものとそれに適した蓄積行動が，農業問題を改めてうまく処理できないという問題を抱え込んでいるという指摘は，ある意味でとても大事なことだと思います。

ただ，問題なのは，そのときに農産物という形で食糧危機というふうにとらえているんだけど，その農産物がどういう形で売買されているかというところが依然としてクリアになっていない。すわなち，シカゴも含めてとてもスペキュラティブな動きの中で食糧が動いているということがあると思います。それは国際的な過剰流動性とリンクして動いているということが明らかで，例えば利鞘を目指して動いている金がその間でどこでも動いているということもあって，特に最近それがひどくなっています。だから，食糧危機という問題を単に1次産品の量的な不安定な再分配というだけでとらえると結構厄介で，資金の流動みたいなものときっちりつなげて議論することが，農業問題を考えている人たちのとても大きな課題になっているだろうと思います。

神山　70年代初めの穀物類の不足・暴騰では一方で投機が入りますよね。アメリカの場合には当時の5大穀物商社が投機によって価格高騰を増幅した。巨大穀物商社の最大手カーギルの商取引の最近の状況は，金融関係の利益が全体の半分だというふうに会社発表でも言っています。70年代初めでも，そういうふうな動きをしている。一方で穀物の貿易を独占しているという形です。穀物輸出を独占しながら，その帰りの船ではスチールだとかアメリカに輸入するという商社としての役割もしていますが，特に最近になればなるほど金融面での投機的活動を強めている。そういうふうになってきていることがいまの穀物貿易なんだということは一つ押さえないといけないだろうと思います。73，74年の場合も，価格を暴騰させ

たのは一方で巨大穀物商社を中心とする投機だったと言えるだろうと思います。

70年代のアメリカ農業は，従来やっていたセットアサイドと言われる休耕していた土地にもどんどん満杯の形で作物を作付けていって，それを全部輸出に回していく。基本的には市場価格は抑え込んでおいて，国内の農民にはかなり高価格の補助金，不足払い補助金ですけれど，そのような形でやってきたのが行き詰まっていくわけです。

金融の動きでいいますと，アメリカの農業生産の拡大，特に穀物生産の拡大は，農民が資金を借りて，土地を借りて拡大していくという形ですから，資金を借りてという側面からの問題が80年代前半のところでアメリカ農業危機という形で表れてきたんだろうと思います。一方で，田中先生がおっしゃいましたが，全面的に特に中西部では作物を作付けていくわけですから，従来，牧草が作付けられていたようなところが小麦だとかトウモロコシになってくると土壌が露出してきて，そこで土壌流出の問題，環境問題が起こってくるわけです。

増田　ぼくは具体的なことを全然知らないんですが，穀物の輸出量が表2だと，71年に1億1800万トンから81年に2億3400万トンになる。倍増ですよね。

神山　そうです。

増田　穀物というのは普通は自給率が一定程度あって，投機的には世界的に流れていても，そんなに……。これ，倍でしょう。倍も増えるというのは，もちろんソ連の輸入というのがワンファクターとしてあるにしても，これは違う事態があると見なければいけないですよね。その一番のファクターは，神山さんは輸出競争でECも中南米もみんな輸出に向かうほど農業生産力がこの時期に急激に上がるということですか。

神山　ECの場合はそうです。70年代末に小麦は純輸出国。

増田　輸入国から輸出国に変わるわけだから，それはすごい転換は転換ですね。

川上　輸出国の側でそういうふうに生産力が上がる話だけではなくて，なぜ輸入しなければいけない国々が増えるのか。

増田　そちらが問題です。

阿部　そのあたりは，かなりベースが大きくて，農業生産の場合，自給のベースが非常に大きくて貿易はマージナルな部分なんです。
ですから，豊凶のわずかな差や，作付け指数の変化が貿易量の大きな変化をもたらすのです。

増田　それは，大事なところですね。

阿部　70年代前半の危機以降増産傾向になったのは，神山先生のお話を補強しますと，戦争が終わって戦後体制がしっかり，高度成長体制が先進国において定着したその成果が出たんだと思います。日本においては明瞭に出ていて，本当の深刻な米不足というのは見事に，昔なら大凶作になった数年前の不作も含めて乗り切っています。農薬漬けだ何だと言いながらも，これは大変な生産力の向上だと思います。予測技術も上がりましたし。それも三ちゃん農業でやっているんですから。日本は米だけにおいてそれが開花しましたが，欧米でもさまざまな保護政策を用いてやっているわけです。70年代の高度成長の成果を資金的・技術的に投入することによって，先進諸国は農業問題の深刻化を防いでこれたわけです。しかし，80年代になると，日本も含めて各国は財政赤字と貿易摩擦問題で重荷になってくる。

増田　それは主として機械化と化学化ですよね。

阿部　そうです。

それから，気候の予想技術の発達というのがかなり働いていると思います。コンピューターを使っての気候予測の発達。シカゴの投機的市場が成立したのには，予測精度が低い時代のヘッジングの意味があったわけですが，後に宇宙から見られるようになってから精度が非常に上がりました。

神山　ただ，70年代になっていわゆる異常気象というのが言われ始めたんです。(笑)

阿部　夜明けの前は暗いみたいなところがあって。それからオイルショックも来るわけでしょう。だから，70年代前半が戦前までの形というか，戦後体制のいろいろな矛盾も出てきて，そこで先進国が対応するわけです。

神山　あと一つは途上国と社会主義国だと思うんです。ソ連をはじめとした社会主義農業が，その段階で崩壊とは言いませんけれど，衰退というか，生産力としては頭打ちになってきました。ソ連の食糧政策を見ていると，輸入に切り換える段階で国家買い付け量を減らしてくるんです。農村部に金を残すという形にしていきます。だけど，それは農業に投資されないで，むしろ農村の生活基盤投資に向かっていく。コルホーズや何かは全部，学校を持っているし，公民館もあれば，要するに行政体ですよね。だから，そちらの生活基盤，インフラ整備に行ってしまったことはたしかなので，農業生産力としては70年代，ソ連しか追いかけていなかったので他の社会主義諸国の把握は不十分ですけれど，あんまり発展していかなかった。

田中　あと，家畜の飼がかなり増えるんではないですか。

神山　そうです。

阿部　国際貿易で一番増えているのはその部分です。日本も圧倒的にそうですね。トウモロコシ，コーリャン。

田中　なくなれば人間が食べるけれども，ちょっとゆとりが出れば家畜にいくわけです。

阿部　いざとなれば，ブタ，ウシに食わせていたものを人間が食うようにすれば，いままでの数倍の扶養能力がまだあるわけです。

粕谷　表2の輸出から表3の輸入を引いて地域別の過不足を見ると，不足は，ソ連も大きいですが，開発途上国が約3倍ぐらいに膨らんでいます。豊かになっているのか，農業が壊れているのか。両方だと思います。豊かになりつつ減る部分と，農業が壊れるのと両方だと思います。それとソ連と中国の輸入を増やせばそれだけの量になって，70年代初めのインフレ的な，先ほどの投機的なやつでいっぺんに刺激されて，アメリカの農業，

ECの供給量が一挙に増えるという構図だろうと思います。

神山　途上国農業というのはそれまでに，穀物生産の部分はつぶされていくというか，むしろ輸入に変わってくる。例えばエジプトで有名なナイル流域の麦と綿花の生産は極端に減っていきます。綿花のほうはその前にやられていますけれど途上国は工業化・開発のために必要な外貨を獲得するために，輸出向けの商品作物の生産を優先して，基礎食糧である穀物の生産はおろそかにされてきたわけです。

粕谷　ここに価格の動きが出ていないけれども，70年代初頭にグッとものすごく上がるでしょう。そのあと80年代にかけてずっと下がっているんではないですか。

神山　いや，乱高下を繰り返すんです。

川上　だから，需給の対応を見るというのは非常に微妙なんです。

粕谷　乱高下でも傾向線としては下がってきていますよね。

神山　60年代は……。

川上　95，96年になるとまた上がるんです。

粕谷　いえ，70年代後半から80年代初めにかけて。

神山　80年代半ばが一つの谷になりまして，ともかく乱高下を繰り返すんです。そして，96年がまた大暴騰をする。

粕谷　ここで注意しておくべきことは，傾向的な低下と投機などによる乱高下とのダブルパンチで，途上国の農業がやられてしまうことではないですか。備蓄とか何かはできませんから。UNCTAD体制は壊れてしまいましたから。

阿部　国際価格が下がるというのは，先進国における補助金農政の影響が第一です。各国とも国内における農業問題が政治問題化するのを防がなければいけない。しかし，輸出補助金や価格支持政策でお互いに足を引っ張り合う。国内の矛盾を外へ押し出す形です。先進国の身勝手が国際市場における価格を下げることになり，有効な対抗策および外貨を持たない南の諸国がもろにかぶってしまう。そちらの国々ではいまおっしゃったよう

に備蓄もないですし，政府の調整能力も低いですから，直接に影響を受けて，国内価格まで下げられてしまうという影響を被っているということだろうと思います。

それが90年代に上がるようになるのは，むしろ先進国側が負担しきれなくなって，それを解決しようというのでEC，そしてアメリカが日本に対する農産物の自由化攻勢をずっと強めてきますが，その時期と重なってくるわけです。それでどうするかというと，できるだけ補助金農政をやめたいという意向がEC側もあるし，アメリカ側もあるんだけど，手法が違うわけです。その手法の争いがウルグアイラウンドで戦われて，値を下げてもいいからとにかく外へ吐き出してしまえという荒い形から，国際価格を引き上げることによって補助金を少なくしても輸出市場でかなりの収入を得られる形にするしかなくなっていくわけです。そういう先進国側の都合，経済的な利害が働いて，いま国際価格を高める方向に行こうとしているということではないでしょうか。

WTO下の農業の今後の方向

川上　具体的な展開についてまたいろいろと問題点が出てきましたが，最後に第3のパートへ移りたいと思います。70年代以降の世界食糧問題の展開の脈絡を踏まえたうえで，いったいWTOはどうして生まれたのか。そしてそれは将来何をもたらすことになるのか。さらには，それで非常に大きい問題があるとすればどう考えたらいいのか。そのあたりを論じていただきたいと思います。最初に増田さんからお願いします。

増田　神山さんの現代の最新の問題について，神山さん自身の書かれたことにそんなに異論があるというわけではないんですが，それこそさっき長原さんが言った，現代というよりも90年代においてすごくおおきく変わったということがあると思います。それがいつからかというのは非常に難しくて，日本の場合はバブルの崩壊以降と言ってもいいんですが，アメ

リカの場合，80年代半ばと考えていいと思います。

これは事実上，グローバル化であり，情報化と言われているんだけど，そのグローバル化と情報化の中身です。その中身は，さっき川上さんがうまいことを言いましたが，アメリカが発見したノウハウですよね。その中心は金融の自由化だとぼくは思います。アメリカは実物でかなり負けてしまっていたので，それを何とか経済再生としてやっていこうというとき，金融の自由化という戦略を全世界に押し付けるという方策を出してきます。

金融の自由化でうまくリンクアップしてくるのが情報革命です。アメリカは情報化を一番先に取り込んでいき，展開していきますが，90年代に入って全面展開をするグローバル化と情報革命の意味とは何か。一番問題なのは，先ほど長原君が言った，国民国家という在来的枠組みがかなり崩れつつあるということです。この問題が特に金融自由化のプロセスの中で事実上，国民国家的歯止めというのが，先進国はおろか第三世界などは全然問題ならないぐらいに，強制された自由化の中でこれが全部取り払われてくるという問題が出てきます。

71年のIMF・ガット体制の事実上の崩壊というのが第1段階だとすると，第2段階はいつかという問題ですが，通常にいえば85年のプラザ合意だと考えていいと思います。85年ぐらいから出てくる体制の中でいったい何が問題か。農業問題ということで考えますと，ウルグアイラウンドは80年代後半から7年間ぐらいやりましたが，なかなか決着がつかなかったですよね。結局，93年の終わりぐらいに決着をつけたわけですが，この決着のつけ方というのは結局，アメリカのイニシアティヴの貫徹です。そういうふうに言うと乱暴で，神山さんのほうがもっと丁寧だと思いますが，アメリカの金融の自由化と並ぶような農産物の自由化。だけど，これ，EUも損してないんですね。先進国の農産物輸出市場のイニシアティヴがある程度とれるような形です。

関税率は別のものをつくっていちおう補助金は残すわけですから，そういう意味でいうと完全撤廃主義者のアルゼンチンとか中南米から見れば不

満だし，輸出国としてアメリカ，EUというけれど，アメリカのイニシアティヴがかなりとれるような形で決着をつけました。それがガットではなくて，新しい機構としてつくったということの意味です。90年代に入ってIMFは崩れ，ガットは崩れというふうで，われわれは世界機関が衰退の一途をたどったと思っていたんだけど，90年代にアメリカのイニシアティヴで復活してくる国際機関というのがいっぱいあるわけです。IMFは完全復活というか，通貨機能はだめなんだけど，世銀をはじめとする資金供給機構として復活してしまったでしょう。

田中　フィクサーです。

増田　そう，フィクサー。ガットもWTOになると，一種の機構で権限を持つようになってしまいました。その権限は全部アメリカのイニシアティヴという形で復活しています。だから，90年代の問題というのも，私などは衰退論者で，ああ，どんどんつぶれていくんだと思っていたら，思わぬところで世界機関が再生させられ，復活させられる一つのパターンがあって，WTOもそうなったと思うんです。これら国際機関がアメリカのイニシアティヴの下で，世界機構として世界を締めつける機関として出てくるという形になります。アメリカは，国連は機能があまりうまくないので使わずに，むしろこういう機関を使うという形に転換してきます。その機構として機能するという形になっています。

その中で一番問題なのは，第三世界に対する暴言というか，命令というのがストレートに出てくるところです。通貨に関してもそうですし，貿易に関してもそうです。第三世界はおろか，日本に対してもすべてそういう形で出てくることが可能になるという問題を考えますと，神山さんの指摘はこれはこれなりにいいんですけれど，そのイニシアティヴはもっと強いのではないか。事実上，逆らえないような形で第三世界が追い込まれていきます。

そこでオルタナティブというのが非常に難しい。通常，私なんかは牧歌的に考えまして，農業というのは基本的に自給である。輸出するのは本来

的でない。食料は，土地に合ったものを土地の人が食べるのが一番いいと，そんな話に結論を持っていこうと思っていたら，世界はそれとまったく裏腹な，ますます輸出と輸入によって維持されるようなものに動いていくという現実を目の当たりにしまして，粕谷さんはオルタナティブな，明るい展望を持っているらしいからぜひ聞かせてもらいたいと思っていますが，私の場合は絶望感に満ち満ちたイメージを強く持ったので，粕谷さんと議論をしたいと思います。

粕谷　明るいオルタナティブではなくて非常に難しい問題だと思っています。だけど，希望を捨てないで，模索するとすれば，何とかするにはこんな道が模索されて然るべきではないかということです。

80年代半ば，レーガン，サッチャーのロールバックというか，新自由主義的な巻き返しがありました。90年代に入ってそれが収穫期を迎えアメリカの相対的に得意なところ。農業もそうですが，とくに金融ですね。そういうところの自由化をすすめ，多国籍企業にドライブされたグローバルな市場が浮かび上がってきた。

ウルグアイラウンドで，いままで相対的にガットの多角的自由貿易からはずれていた農業サービス，さらにTRIMsやTRIPsなど新しいイッシューを取り入れてアメリカの得意なものが浮上する方向へ一挙に踏み切り，それを途上国も飲んでしまいました。日本とかEUというのは半分，多国籍企業があるから同調しやすいんですが，こんなにやられるとは思っていなかったでしょう。途上国も自由貿易をやれば，経済発展しその結果，環境に対する配慮もできるようになるし，貧富の格差も縮まっていくというトリクルダウンを信じ込まされてしまって，WTOというか，マラケシュ合意を飲めば未来が開けるみたいなところで同意してしまったんですね。

でも，WTO移行後の5年を追跡調査してみたら，とんでもない事態が広がってしまっているわけで，その帰結が昨年末，11月，12月のシアトルです。いままでもそうですが，だいたい途上国はそっちのけにされ，グリーンルームで有力な国が決めてしまって，途上国は言うことを聞かされ

てきた。ところが，マラケシュ合意からの5年間の実情を見ると負の面が非常に出ています。それともう一つ，1972年の国連人間環境会議，ストックホルム会議頃からNGOの台頭が見られ始め――インターネットの発達にも助けられて――国際的な決定のプロセスにだんだん登場してきて，リオサミットを機会にそれがさらにそのプレゼンスが大きくなってきました。このごろ国際会議というとだいたいどこでも並行会議を開いて世界中からNGOを動員して，圧力をかけるようになりましたね。紆余曲折はありますけれど，これがかなり顕著な影響力を持って，投資協定を流産させてしまったり，遺伝子操作も，これからわからないけれど，少なくとも一時ストップさせたという力を持ってきています。

それと，WTOはだんだん開かれると言っていたのが，いざ蓋を開けてみるとそうではない。有力国がグリーンルームで行った協議の結果を認めろと言われたとき，多くの途上国は，その内容がわからず一挙に怒りが爆発してしまった。そういう第三世界の反乱というのがありました。だから，ロールバック作戦はかなり成功してきたのだけれど，もしかしたらWTOのシアトル会議が歴史の分水嶺になるかもしれないとインドの運動家のバンドラ・シバが言っています。非常に楽観的だと思うんですが，ひょっとしたらと思わないでもありません。NGOの間でも，特に先進国の労働組合と途上国のNGOとの間で，環境問題や国際労働基準の問題で深刻な対立があって，これがシアトル会合がうまくいかない一つの理由だと言われるぐらいです。それがうまくコンセンサスを得られないようではなかなか難しい。

農業について言えば，神山さんが言われていたフレンズ諸国ですか，EU，日本，ノルウェー，スイスが農業の多面的機能ということを言ってきています。これは社会・環境原理で自由貿易原理，市場原理に対抗しようという動きです。買いかぶりかもしれないけれど。

つまり農業の環境維持機能，コミュニティー維持機能などに注目して，増産に結び付かないということを条件に所得補助を行うというデカップリ

ング政策を主張して農業の自由貿易を推進しようとするアメリカと対立しています。

増産に資さないといっても，すでに輸出している場合は，他国の農業破壊をすすめる輸出補助金によるダンピングになってしまうので，これは問題外ですが，自給については積極的に環境，社会原理を適用させるように政治的な力の結集が必要です。

もっとも，農業の多面的機能の創出をより切実に必要としているのは，途上国，とりわけ最貧国です。それゆえ，EU や日本は自国のみのそれを図るのではなく，途上国のそれとの連携のもとになされなければならないでしょう。そういう農業の多面的機能を維持拡大していくような仕組みを考えていくことが神山さんが言っている多国籍企業封じ込めの一つのてこになるのではないか。

アメリカのジェレミー・ブレッカーがリリパット戦略ということを言っています。多国籍企業，それに結びついた先進国の動きを，1本1本は小さい糸だけど，たくさんつなげばガリバーを押さえつけることができるというわけです。かなり太い糸になりうるのではないか。先程は対抗する陣形なんてことを言ったんだけど，昔流の硬いのではなくて，新しい社会運動みたいなネットワークですね。情報化技術を逆に使って NGO を連携する。それにはさっき言った国際労働問題とか環境問題でクリアしなければならない点があるけれども，このようなリリパット戦略でグローバライゼーション・フロム・ベロウ（Globalization From Bellow）9月にそういうタイトルのブレッカーの本が出ると予告があったのですが，そういうのが考えられるとすればオルタナティブになり得るのではないかと思います。

日本がどのくらい本気でちゃんと環境社会維持，コミュニティー維持を考えているのか。どうも米価政策がだめになってしまって，もう少したつと農民がいなくなってしまうから，その間のつなぎに所得保障ぐらいを中山間地でやって政治的にごまかそう。そのうちに保守党，自民党の基盤を都市に移せばもういい。それまでの時間つなぎだなんてなってしまうと，

これは非常に問題です。そうではなくて，本当に真面目に途上国と協力しながらやっていけば一本の糸になると思うのですが。増田君はもう真っ暗だというけれど，強いて見つけるとすれば，そんなところに希望があるのではないかと思っています。だいぶ甘いかな。

長原　増田さんの議論でいちばん確認しておかなければならないのは，増田さんはアメリカ，アメリカとおしゃっているわけですが，このアメリカは依然として国民経済ですね。けれども，この「他のポケット」に手を突っ込んでくるものがアメリカだ，とも言う。他の国民国家的な，もしくは国民経済的な，領海とか領土とか境界領域はみんなボロボロにされて，孔だらけされて，どんどん手を突っ込まれている，というわけです。それじゃ，手を突っ込んでいるのはアメリカだというとき，そのアメリカはいったい何なのかという問題があると思います。

これまで国民国家，国民経済という形態で捉えられてきたものと異なっているとすれば，なぜアメリカだけが他の国民経済の境界を孔だらけにして手を突っ込めるのかという問題をきちっと経済学的に考えておかなければいけません。オルタナティブを考えるときも，そうしたことが考えられていないと，反グローバリゼーション論が簡単にナショナルな反米なんてことになり，もうどうしようもない錯誤を反復することになる。アメリカだけが勝利していて世界経済を支配している。その時アメリカというのは国民経済なのかと聞かれると，みんなちょっと沈黙してしまうところがあるだろう。

そうしたことを考えるときこの間のシアトルを始めとする反WTOの運動はある重大な論点を照射していると思います。将来振り返って考えたとき，そこで何かが起きた，といった理解が起きる可能性が高い運動なわけです。そんなことを考えるとき，粕谷さん風に，こういうときはバラ色で話してみるほうがいいんだろうけれども，それは新しい社会運動として対抗しようとする対象が何か，ということがすごく気になります。何に対して批判をどのように向けているのか？　旧来のアメリカを中心とした国

際的なシステムみたいなものに対しているのか？　あるいはアメリカがこの間，ひとり勝ちしていることに対抗しようとしているのか？　運動としての批判対象とその理論的根拠を明確にしなければいけないと思います。

粕谷　それには2面あります。ひとつは昔の運動はあまりにも批判対象を絞り過ぎていたのが失敗というか，問題でした。もっと地に足の着いた自分たちの生活というか，自分たちにとっていま何が一番問題か。これが新しい社会運動だと思いますが，それだけだと何が何だかわからない。

長原　リリパット戦略ですね。問題はここなんです。

粕谷　さっき阿部さんが言った，最近の学生は昔流の労農的な，そういう問題にかぎらず，ゴミをどうするかとか，食の安全をどうするかという話ですが，それは重要だと思います。いまの学生が真剣に考えるきっかけになると思います。それに，それだってリリパットの1本の糸になります。しかし，もうひとつの方向としてそれを整理し，編集していくベルトルも必要だと思うんです。もっともフィードバックして，それをまた全部まとめあげて，敵はあれだなんてことをやると，これはまたとんでもないことになりますが。

長原　それって依然として緑も囲い込んで赤に持っていこうというふうなことではないですか。

粕谷　緑だとか赤だとか思っているうちはだめなんだよ。（笑）やはり自分の現場，地域，地域が非常に重要になると思います。環境と社会の維持，農業を再生させる。それぞれ本気でアジアとかサブ・サハラとか何かでやらないといけないんです。しかし日本は日本の中山間地帯のことばかりを考えていますが，同時にアジアのどこかの地域と提携してどうできるのか。フェアトレードのように，日本が向こうからのものを入れて，こっちからは人も出してそれらと，アソシエーションという，目に見える手もつなぎながら，準世界的公共財というか，世界国家がないから準ですけれど，そういうのと連動しながら少なくともリージョンな規模でアジアの環境と食の安全につなげていくという連携の方向も必要だということです。

いわば「多様性における連携」です。

増田　粕谷君の提起していること自体に反対というよりも，私が非常に難しいと思うのは，長原君の出した問題とも関係するんだけど，金融の自由化の中で国民国家の概念がかなり変わってきているのに，それでも通貨なるものが，前は円であれば日本は支配できるというふうな形での秩序がそれなりにあって，大蔵省が嫌われようと好かれようと円は管理できるとやっていたわけです。そういう時代であれば，金融の自由化といってもそれなりにチェックとコントロールをある程度しながらやればよかったんです。

でも，歯止めをどんどん外してきてしまった現在，国民国家の単位で経済を考えるというとき，実物は相変わらず国民国家の単位で動いているんですよ。農産物も国民国家の単位で輸出したり輸入したりという形で動いているときに，実物の取引の1000倍から何万倍の額が金融で動いてしまっています。そうすると，そういうコントロールが粕谷君の言うような地に返れ，現物に返る基盤の前提として金融の自由化の行き着く先が金融恐慌か何かでこれがぶっつぶるれといった話が出てくれば別だけど，これが空回りしているかぎりにおいて，なかなか実物のほうに人々の目を向ける機構がないんです。人間が金の世界に走るようなシステムがどんどん拡大再生産されてしまうようなシステムになっています。これはやはり川上氏に，いちおう専門家に聞かないといけないんだけど，金融恐慌が起こればある程度というのはわかりますが，そう簡単に金融恐慌も起きないとすると，その解決はどうなるのか。金融の自由化の行き着く先のめどが立たない前に，オルタナティブはなかなか難しいんではないかという感じが私はしているんです。

粕谷　金融恐慌が，アメリカの株式ガラがどういう具合に起こるのかというのは川上さんに聞きたいのだけれど，起こればものすごく大きな転機になります。だけど起こらないとしても，小さな試みでいま地域通貨とか実際に試みがかなり広がっているわけです。フェアトレードだって広がり

うるわけです。それから，例えばトービン・タックスなんていう議論があって，投機的な取引は国際的な準公共財でチェックしようといったことがある。そういうのがいくらかでも出てきているという土壌があるところにもしガラッと来ればかなり見込みがあるのですけれど，そういうのがないときにガラッと来たってだめなんです。だから，来ようと来まいとリリパッドの糸は紡ぎ出そう。

阿部　いま増田さんは金融の破壊的なパワーについて述べられましたが，その影響はたしかにあるとして，粕谷さんがおっしゃったように，そういうものの埒外からの生活者の視点からのさまざまな，NGO に象徴されるような運動，動きがかなり政治，経済まで動かしうるところまで来ています。金融がどうなろうとそういう方向での芽はある。芽生えてしまって動いている。それ自体に事実的な発展の要素を持っているという気はします。これはおそらく止まることはないので，そういう意味ではオルタナティブになりうるのではないかという感じがしています。

田中　この座談会のしめくくりをどこへ落とすかということがあるんですが，そこまで考えているわけではないんですけれど，国民経済という枠組みが崩れてきた。だから，さっき長原君が言ったように，アメリカといったとき実態として何を描くのか。現代資本主義というとき，国民経済の枠から外れているものが範ちゅうとして三つぐらいあります。一つは多国籍企業なり多国籍資本です。これはいまものすごい勢いですから，一国主義というのはかなり薄れてきましたよね。もう一つは WTO みたいな一種の国際機関です。これは特に金融とかそういう面ではすごい力を持っています。もう一つは，どの程度評価したらいいかということがありますが，先ほど粕谷君が言った NGO みたいなものです。

グローバル経済とか，世界経済の自由化とか市場化というときに，それぞれで違った絡み方をしているわけです。例えば農産物でいうと，自由主義と言うけれど，いままでの工業的な手法に代わるものとして，大手のメジャーはだいたい次は生物学的な手法だということはとっくに言っていま

す。それに備えて彼らが新しい品種などをつくり出せば，特許という縛りもあるけれども，かなりえげつないわけです。つまり種子というのを毎年買わなければいけないというふうに改造してしまうわけです。そうすると，まさに新しいオルタナティブという新しい農業生産の手法自体が，また大手によって完全支配されてしまう。それに対してどうするか。NGO がそれに対して対抗軸たりうるか。いますぐそういうことにはならないかもしれないけれども。

粕谷　だから，いま WTO でそれが問題になっています。種子とか遺伝子とかの国家主権の問題を認めないと反対だと南がかなり固まっています。もちろん NGO はそれで固まっているけれど。

神山　ウルグアイラウンドの結末，結論がどうだったのかというのが，WTO 体制の本質の議論になると思います。ウルグアイラウンドが始まる段階で，金融を含めたサービス分野を交渉対象にするのかどうかというのが，先進国と途上国との間の対立点だったと思います。それがウルグアイのプンタ・デル・エステ閣僚会議の段階で交渉分野にまがりなりにも入った。その結果として，アメリカとかヨーロッパいうところにとっては不十分でしょうが，金融の自由化が世界経済の一つの方向として方向付けられてしまったということだと思います。それが WTO の本質ではないか。

ほかの関連する分野として知的所有権とか貿易関連投資とか。貿易関連投資なんていうのは回収しやすいように決められたということだと思いますし，知的所有権も遺伝子組み換え技術も含めて開発権者のところに金が行くというスタイルになってしまった。それと農業問題を考えていきますと，金融の自由化を進めれば進めるほど，しかも投機的な行動が増えていけば増えていくほど，資金循環は崩れていって，例えばアメリカに本拠地を持っている多国籍企業があるんだとしたら，そこに金が戻っていくのかというと，どうも怪しい。国際的な資金循環はかえって乱れ，遮断されている部分があるのではないかと思っています。

田中　この間に東南アジアの成長とそのあとの破綻がありますね。これ

はまさに国際的な一種の過剰流動性が東南アジアへドッと入ってきた。それで工業化されて非常に変わったんだけど，それが何かのはずみでまたダーッと引き上げると途端に荒れ地みたいになってしまった。マハティールなどは本能的にそういうのをキャッチしていたのかどうか，ともかく国際資本の動向に彼は抵抗していたけれど，そのへんの資金の動きが，いま神山さんの話だと，どこから来てどこへ還流していくのか。構造的に文字どおり過剰なやつが台風みたいにウロウロしているというイメージなのか。川上さん，どうなんでしょう。

川上　一番のベースにあるのは，アメリカの毎年の巨大な経常収支赤字の垂れ流しです。垂れ流しているんだけど，アメリカ金融市場の高金利でそれをもういっぺん引きつけて，しかもアメリカも動きながら世界も動かす。それは結局，ニューヨークに対抗できるような金融市場が日本なりEUなりにないからです。そういう条件の下でアメリカが新しく発見した自分中心のグローバルな資本蓄積の構造が成り立っています。単純に多国籍企業の中の循環という話ではなくて，それを核としながらも，もうちょっと離れた世界的な資金循環だと思いますが，そういう仕組みをつくってしまった。しかも，それはフリードマン等がマネタリズムでしゃかりきにインフレを抑制するということをやったときに，そこまで頭が回っていたはずはないんですが，そういうものが生まれてしまった。そういうものが生まれると，ケインズのように通貨を一国的に考えていた図柄ではもうなくなってしまったわけです。金融のところでどういうふうにその問題を整理するのかということが大きい課題として問われていますが，今日は農業問題の座談会なので，そこまではなかなか……。

長原　ただ，通貨というのは基本的にはその額に国家主権というものを貼り付けているものだと思います。ドルというものも依然としてアメリカという，ある種の国民経済的な〈まとまり〉でもって最終的に決済されている問題だとしたら，それはどこで収支されているのか？

川上　グローバルに回して全体を動かしているんだけど，依然としてア

メリカの経常収支，ドルが垂れ流されているということは変わっていないわけです。それが全然問題として問われない形でずっと進みうるかというところが問題を解く一番の鍵なのではないかと思います。

粕谷　少なくともリリパットの糸は，一つは経常収支のけじめをつけろと。

阿部　その最大のスポンサーは日本になっているわけでしょう。

粕谷　まさにそうです。

阿部　やはり国際化してしまっているわけです。だから，アメリカの言うことを聞いているようだけど，アメリカの利益を図っていることが，実質いまの日本のどうしようもない経済状況を金融面で支えている。国際的な仕組みの支えになっているわけです。

長原　粕谷さん風にリリパットの戦略でいうと，経常収支をちゃんとしろと言うことは，しっかりした日本資本主義たれ，国民国家，国民経済たれ，と言うことに等しいんじゃないですか？。

粕谷　日本資本主義ではない。しっかりした日本経済たれ，アジア経済たれ。さっき言った環境，社会原理をきちんとして，アメリカが壊れようと，ガラがこようと，とにかくアジアは生きていかれるという展望があれば政治的な発言力も強くなれる。

長原　ぼくが聞いているのは，グローバリゼーションというのが加速度的に出てきて，すごく大きな問題が起きている。それに対して批判するときに何を言っているかというと，ついナショナルなのもにしがみついてしまう。

粕谷　ナショナルではないんですよね。

長原　そういう構図の中に押し込められてしまうというのがすごく大きいんです。問題は，さっき田中さんが言われたように，多国籍企業とWTOとNGOという三つの要素がすごくクリアに出てしまうんだけど，WTO，じゃ，そこに集まっている人間はどこの人間なんだ。議論し合って，交渉し合っているのは何だといえば，依然として国民経済を代表して

来ているわけです。

粕谷　でも，その国民経済の代表がNGOによって変わってきている側面もあるわけです。

長原　国際法には基本法は存在しません。要するに戦争状態で交渉し合っているわけです。WTOなんてある種の戦争状態で交渉しているわけです。それじゃ，NGOは何を根拠にしているかと言えば，もしそれが国民国家とか国民経済を抜けたところで連帯しながら，批判運動を展開し，例えばWTOの交渉空間に介入しているとすれば，それはどういう空間なのか，という論点は結構興味深いんじゃないですか？

粕谷　新しい空間です。グローバル・シチズンシップとか，いろいろ言われています。しかし，NGOは何を代表しているのかと言われると，弱いところもあるわけです。〈国民国家のsuperとsubへの重層化〉と〈システムvs.社会運動〉の絡み合いの中で生まれる新しい空間は，私にとっても，きわめて興味深いものがあります。

長原　厄介なのは，サミットでもNGOのためにわざわざ空間をつくってやっている。それがぼくにとってはもうとてもうさんくさいんです。

粕谷　それはいろいろあってよいのではないですか。さっき言った多角的戦略です。

神山　WTOシアトル閣僚会合の話が出ましたが，その特徴は一つは，WTOの加盟国は，途上国が8割を超えるようになってきたこと。そういう面では途上国の発言力が高まった。それと農産物の貿易からいうと，農産物の商業的な貿易を拡大すれば途上国も潤うんだよというのが先進国側の，特に穀物輸出国側の言い分でした。ところが実際は，先進国の穀物輸出国の輸出はたしかに一時的には増えたんだけど，途上国の農産物全体，特に熱帯産品の輸出額はむしろ減ってきてしまって，穀物輸入のほうだけ増えている。途上国は農業分野の合意については裏切られたというか，結果としては途上国は不利だという状態にいま，なっている。それが途上国がWTOの，特にシアトル会合で発言力を強めた一つの経済的な根拠に

なっているのではないかと思います。あと一つは，NGO の発言力というか，別の舞台がつくられていますけれど，影響力が強まってきていまして，ここが今後の国際関係を見通す上での一つ突破口だと思います。

農業分野でいま組織されている多面的機能フレンズ諸国というのは，EU が入って，日本が入って，韓国と，EU から外れているヨーロッパのノルウェー，スイス，それに途上国が入り始めて会合参加国は合計 40 カ国になってきています。ただ，途上国を入れていくとき，組織化するときに，例えば日本が組織化するとなると，開発援助，ODA で優遇しますよ。だから，農業が持っている多面的な機能に十分配慮した貿易ルールにすべきだと主張のグループの会合に参加しませんかという言い方もされています。途上国にとっても基礎食糧である穀物を自給していく体制に持っていくべきだという主張はいいんですが，開発援助を政策的な手段にしながら途上国を組織化しているというふうにぼくはどうも見える……。

粕谷　それでいいのではないですか。問題はどのような政策かです。途上国への開発援助について，昔の植民地時代からいまの世界経済の構造をつくったのは，だいたい先進国です。だから，先進国には非常な負債があるのです。途上国が自立していくのにどんな形であれ，民間・民間であれ，NGO 間であれ，世界的な公共財において援助の ODA みたいなもの，ちゃんとしたやつを仕組むというのは，先進国では国際グローバルシチズンの義務です。これはやはり明確にしないといけないと考えています。

増田　理念的にはわかるけれど。

粕谷　だから，先程申し上げたような政策ならば ODA を使ってもいい。

阿部　いまの国際金融化の話から，金融が国境を越えたと同じように，これからは人ですね。モノが国境を越えるということは太古から行われていましたが，情報とともに労働力など，人の移動が巨大になった。これはおそらく 21 世紀というか，ミレニアム的にいうと，2000 年代には事実上，国境がどんどん瓦解していって，ようやく世界国家ができていく方向に進みつつあるという動きだと思います。

そのときに五味さんとの関係でいいますと，特に第三世界の苦境の大きい問題として農業・農村の衰退，都市化問題ということがありますが，私はそれはある程度必然ではないかと考えています。五味さんがどう考えていたのか本当は聞きたかったんですけれど。ガルブレイスが『大衆的貧困の本質』という本で，そういう諸国が発展するためには，農村を捨てて移住するしかないというんです。移民論というか，移住論です。それによって新しい文明が出てくる。残った農村が近代化していかざるをえなくなる。一度農村を捨てろと言っているわけです。考えてみると，日本の近代化もそうやってなし遂げられたし，ヨーロッパもそうです。彼がアメリカ，つまり世界中から国を捨ててきた人たちによってつくられた国，今後も世界をリードする国の人であることが，その発想の根源にあるのでしょうが。

それは日本でいうと大都市への流出のほかに，出稼ぎという形もあります。出稼ぎ問題について五味さんも結構かかわっています。彼は出稼ぎを否定していません。彼が言っていた江戸時代から杜氏とか，大工や何かの渡り職人など，高度な技術を持った移動する職人としての農民がいて，特に東北の場合ですけれど，農作業のない冬の時代に移動して農村を維持する資金と情報をえていた。これを彼は高く評価していたと思います。

小谷村の土砂災害が長野オリンピックの寸前におきたとき，「信濃毎日」だったかのインタビューで，そこで亡くなった人たちの多くが北海道ほか遠方の農村に本拠を置いて，重機などの高度な免許を持った技能者たちだったことを強調しています。こういう人たちがいることを彼は悪いと言っていないんです。農村が生き延びるには，そのような渡り職人型の高度な技能を持った人たちが，農作業も行うけれど，生産力が上がれば手間はどんどんいらなくなるわけですから，その間に渡り歩くという形。彼は農村工業についてほとんど語っていないような気がします。そのあたりは田中先生のほうがよく議論されていると思いますが，彼は可能性についてあまり期待していなかったんだろう。日本でも農村工業が，新工場なり何なりが70年代，80年代にやたらできましたが，いまは多くは撤収しています。

そういうことを考えると，彼はそういう道も考えていたのではないかと思います。

それはひょっとするといま国際的に国境を越えてきているんだろう。近くのアジア諸国からはむろんのこと，遠くイラン，バングラデシュからも大挙して流入している。非合法で危険な手段を使ってでも来ている。そして，ヤミルートで送金している。なんであれ，これも大きなグローバリゼーションの波ではないか。国内において日本でやったようなことの国際化の方向を示しているのではないか。強引ですが，五味さんの視座には，今後の人類が結んでいく人種関係，つくっていく世界の一つの方向も入っていたのではないかという感じがしています。

川上　まだいくらでも議論は出てきそうですが，時間がずいぶん超過してしまいました。食糧供給と地域環境保全という人間の生活に本源的な役割を果たしながら，世界市場システムにおいては工業的中心に対して矛盾をしわよせされる周辺に位置づけけられている。農業，ひいては農村社会の将来を考えた場合，いま猛威を振るっている市場原理主義ではうまくいかないということは，皆さん共通していると思います。しかし，どういうふうに展望するかということになると，まだまだ難しいということではないかと思います。大きな転機を迎えているだけに，こういう議論は五味君もとうとうやりきれないまま逝ってしまいましたがだれかが鋭く方法的に整理した問題提起をおこなって，折に触れて詰めていかなければいけないのではないかと思いました。

今日はどうもありがとうございました。